

日本語教育研究センター3年間の歩み

A Report on the Latest Activities of the DHU Center for Japanese Language Education

富田 美知子 TOMITA Michiko

デジタルハリウッド大学 特任教授/日本語教育研究センター長
Digital Hollywood University, Professor

白 皓 HAKU Hikari

デジタルハリウッド大学 講師
Digital Hollywood University, Lecturer

川口 義一 KAWAGUCHI Yoshikazu

デジタルハリウッド大学 特任教授
Digital Hollywood University, Professor

2017年4月、多様化する留学生に対して、本学の留学生の資質に即した日本語教育の実践研究を行うという趣旨のもとに、日本語教育研究センターが設立された。センターの活動としては、本学の留学生の資質に即した日本語教育の実践研究、より実態に近い他の研究・教育機関および地域社会との連携を図る各種イベントの開催、更に日本語教育のための書籍などの出版などがある。その中の主なるものとして副言語使用教育がある。本稿では、この約3年間に行った数々の研究・公開講座を改めて検証し、今後のセンターの在り方を探りたいと思う。なお、全編を通じて、特に断りのない箇所の執筆は、本稿筆頭執筆者の富田美知子がこれを担当した。

キーワード：多様化する留学生、副言語クラス、地域社会への貢献、他の研究・教育機関との連携、日本文化体験

1. 背景と設立目的

本学は開学当初には、ほとんどの留学生が中国語圏からの学生であったが、時が経つにつれて、他の言語を母語とする入学者が増えつついった。

2020年度は、英語圏をはじめ、韓国語圏、更にフランス語・イタリア語・ロシア語圏などの多岐にわたる言語を母語とする留学生が入学してきている。日本語教育研究センター開設は、2017年の4月1日であるが、それ以降現在までの活動には、次のようなものが挙げられる。

- (1) 多様化する留学生に対する日本語教育の実践研究
(研究結果発表・公開講座)
- (2) 他大学と差別化された本学の留学生の資質に即した日本語教育
(副言語クラス)
- (3) 地域社会への貢献
(公開講座の一部)
- (4) 他の研究・教育機関との連携
(スピーチコンテスト)
- (5) 将来の日本での就職も見据え、より深く日本文化を理解し、それに根ざした日本語表現ができるようにする日本伝統文化体験
(日本文化体験)
- (6) 日本語教育のための書籍などの出版
(『視覚で読む百人一首』『私の国の昔話—こころのユートピア—』)

2. 副言語クラス担当教員からの報告

前章で列挙した本センターの活動のうち、(2)の具体的な教育実践たる「副言語クラス」について、実際にこのクラスを担当している川口特任教授と白講師が報告する。

2018年度から始まったDHU日本語基礎講座の「副言語クラス」について、その設置の理念とそれに基づく指導実践の報告を行う。

「副言語クラス」というのは、DHUの学内研究機関である「日本語教育研究センター」のプログラムの一つとして設置されたもので、

日本語基礎レベルの指導において、登録学生の理解できる言語を「副言語」として設定し、主たる指導言語である日本語とともに積極的に使って、日本語への理解を深めようという趣旨のものである。「副言語」として認定されているものは、現在のところ「副言語1：英語」と「副言語2：中国語」である。日本語基礎講座のうち、「文法・読解」のDクラスとEクラスが第1クォーターから第4クォーターまでの1年間、この2つの「副言語クラス」に分けられ、中国語母語の学生が「D-2/E-2」の中国語副言語の、それ以外の母語の学生が「D-1/E-1」の英語副言語の2つのクラスに、それぞれ登録されて日本語教育を受けている。

2.1 DHU日本語基礎講座「副言語(英語)クラス」実践報告

「副言語」で指導をすると外部に説明するときに、よく誤解されるのは翻訳語を頻繁に使うのかということである。例えば、日本語の補助動詞に～テオクという形式があるが、この意味・用法は非母語話者には少々難しく、習得が進まないということがよく言われる。しかし、この補助動詞の意味の一部である「事前に準備する」、つまり「試験の前に勉強しておく」のような例を根拠にして、これを”to prepare”であると教えるのかというそうではない。

～テオクは、補助動詞部分が「置く」であるところから、この動詞のもともとの意味を反映して用法が出来上がっており、”to prepare”であるのは、その一部に過ぎない。～テオクというのは、「～」の部分に入る動詞の完了の概念が現出(完了接辞の連用形であるテがこれを保証)したところを認識して、その概念が「あたかも物体を平面にしっかりと据えて置いたがごとく、ゆるぎなく継続し続ける」ととらえることなのである。すなわち、試験の前に勉強しておけば、その結果が脳内にとどまって正解を得やすいというのが、「試験の前に勉強しておく」の意味するところなのである。同様に、「結婚する前に友達と泊りがけで旅行しておきたい」という文には、結婚後は二度と許されないであろう気の置けない友人との長期旅行をして、その記憶をゆるがぬものにしておきたいという気持ちが表されている。この例では、「結婚する」と「泊りがけで旅行する」は”to prepare”の関係にはなっていない。

「副言語クラス」の担当教員は、こういう説明を指定されている日本語以外の言語で過不足なくできなければならない、単にビジネス場面で正確に英語が使えるのとは別の能力を要請される。しかし、このような能力を持つ日本語教師は、現在のところ、特定の大学院課程を経て訓練を受けさせないと養成できず、人材としては供給に相当な制限があると言わざるを得ない。したがって、もしこのような人材を得ることができなければ、「副言語クラス」は存在意義がないとも言える。精巧なAI辞書などがあれば、代替にはなるが、そもそもそういう視点で作られているAI辞書や教材そのものがなく、その開発を待つ間は、正しく訓練を受けた教師に頼らざるを得ないのである。

さて、筆者の実践の様子であるが、上述のような理念と技術で指導しているせいもあり、初めの2クォーターあたりまでは「副言語」としての英語の働きは有効である。ただ、その間に学生の日本語レベルが上がってくるので、3クォーター以降は「副言語」の英語の出番がないことが多い。更に、おもしろいことには、東南アジアの華僑系の学生には、漢語を中国語で説明したほうが早いものがあったり、韓国学生に対しては漢語のみならず、固有の韓国語で日本語と似た用法のものがあったりするので、次第に「副言語」が英語・中国語・韓国語と多言語化していくのが現実である。

そうすると、もはやこれらの「副言語」は単語や文法の説明に使われるよりも、教室の注意喚起や学生とのメール返信時のあいさつやジョークの部分で使われたりし始める。しかし、これも、学習者の情意面をサポートするための「副言語」の役割と言えるかと思われる。

2.2 DHU 日本語基礎講座「副言語(中国語)クラス」実践報告

続いて、副言語(中国語)クラスにおける、副言語使用の長所と短所をそれぞれ述べる。

長所としては、学生側の発言のしやすさが挙げられる。特に日本語能力が高くない学生は、質問や発言を母語で行えることで、発言がしやすくなる。筆者の担当クラスでは、初級レベルの学生は、授業内はよく中国語で質問をする。文法の質問や自らの意見を述べる際、詳細に結束性を持たせた発言を、中国語で行う。また、学習者同士の中国語の会話も生まれる。学習者の日本語レベルは初級である。そのため、学習言語である日本語で質問をする場合には、自らの伝えたいことを完全には伝えられないことがある。そこで、発言や質問を気軽に中国語で行えることは、初級学習者にとって長所となる。

一方で、短所としては、「同国、あるいは同言語圏出身者のみのクラス」編成になる恐れがある点が指摘できる。出会いの可能性に関する議論となるが、学習者は、中国語圏以外の同級生とともに学習する時間が、副言語クラス分だけ少なくなる。文化背景の異なる、同国以外の学生同士との交流や作文をともに見聞きする点で、新しい出会いや発想に繋がることもある。副言語クラスでは、母語を使用した文法解説に有利である反面、母語の性質上、同じ中国語圏出身者のみのクラス編成となってしまう。そのため、出身国を越えた交流や学習機会が必然的に減る。つまり、出身国以外の学生の意見を聞く機会が減るのである。例えば、読解クラスでは、「異文化」をテーマにクラス内で議論を行うことがある。議論では、各自の文化背景を理由に意見が述べられる。しかし、中国語副言語クラスではこのような機会が、英語副言語クラスより相対的に少なくなる。議論の際、自らの経験や背景を越え、異なる考えを持つ他国出身の学生の意見を聞く機会も、留学生には重要な機会となる。

ただし、2020年現在、副言語クラスは、文法・読解クラスのみで開講されている。そのため、聴解や作文、会話といった他技能を扱う授業で、学生の出身や背景が異なる点を上手に活用した授業デザインを取り入れることが重要だと言える。

以上、副言語クラスにおける、副言語使用の長所と短所をそれぞれ述べた。長所は、学生側の発言のしやすさであり、短所は、同言

語圏出身のクラス編成であった。また、短所を補う点として、副言語クラス以外の授業において、学生の出身や背景が異なる点を上手に活用した授業デザインを取り入れる点を提案する次第である。

3. 地域社会への貢献

地域社会への貢献を目指す活動としては、次に示す無料の公開講座を行った。当初、本学の所在地である千代田区の地域日本語教育支援ボランティア団体を対象に企画していたが、その後都内・近郊の在住者に対象を拡大して広報した結果、多くの参加者を得た。

3.1 第1回公開講演会

【日本語とは一日本語を外国語として捉えると】

日時：2018年7月25日(水) 19:30~21:00

講演者：川口義一 氏(デジタルハリウッド大学特任教授・早稲田大学名誉教授)

会場：デジタルハリウッド大学 E12-13教室

この講演は、36年に及ぶ学術研究と教育実践のキャリアを有する日本語教育の専門家で、本センター特任教員の川口義一教授(早稲田大学名誉教授)が、日本語を母語にしない人々のための「外国語としての日本語」の姿を、「発音」・「表記」・「文法」の三分野について、それぞれどのように指導するのかを解説する。

講演主旨：

私たちが日頃使用している日本語を外国人に伝え、global languageにしていくためには、「外国語としての日本語」を知らなければならぬ。外国語として紹介したり、教授したりするとき、日本語をどのように捉えなければならないか。そこには、国語としての日本語とは、まったく異なる日本語の性格や特徴が見えてくるのである。日本語のグローバル化のために、いまこそ外から日本語を眺めてみる必要がある。

3.2 第2回公開講演会

【40分で話せるフランス語—サイレントウェイ教授法による主体的学習法】

2019年7月9日(火) 19:20~20:50

第2回講演会は、第1回講演会と同様、本センター教授の川口義一教授によるものである。学習者の主体性を重んじる「サイレントウェイ(The Silent Way)」という教授法についての解説だが、その効果を実感してもらうために、希望する参加者にフランス語のミニ会話レッスンを行った。40分ほどの間に参加者はフランス語の初対面の会話ができるようになった。この実験を踏まえて、この教授法の日本語教育への応用についても説明した。



図1：第2回公開講演会ポスター

4. 他の研究・教育機関との連携

4.1 留学生日本語スピーチコンテスト

日本語スピーチコンテストは、デジタルハリウッド大学で日本語を学ぶ外国人留学生などの学習成果の発表の場として設けられたものである。内容としては、日本語科目を履修している1年生から3年生までの各クラスから、第1部の朗読部門、第2部のスピーチ部門において、それぞれ選抜された学生が発表を行う。

コンテストの流れとしては、各部門の発表の後、審査員の評価を集計し、最後に各部門の1位、2位を発表・表彰する。

スピーチのテーマは毎年異なるが、2014年度に開始してから最初の5年間は、学内の留学生のみの参加であったが、2019年度からは、他の研究・教育機関との連携を目指す活動として、他大学からの参加者を募り、拡大させた形のコンテストを実施した。その結果、「日本大学留学生センター」のご協力と同機関の留学生の参加を得、本学学生と競い合っ、互いにより刺激を得た。今後は、更に多くの外部機関の留学生の参加が得られるように広報していきたい。

図2は、2018年度のスピーチコンテストの写真である。



図2：日本語スピーチコンテスト

4.2 「日本文化体験：留学生に日本文化を紹介する集い」

「日本文化紹介の集い」とは、国際ソロプチミスト東京が主催する留学生のための「日本文化体験」イベントである。

この行事は、IMSA基金本部を会場として、日本文化を同基金委員と留学生がともに体験する活動である。国際ソロプチミスト東京では、各分野の一流の専門家を講師として迎え華道、茶道、書道、折り紙などの伝統的な日本文化を留学生とともにJNSA基金本部委員の下で体験する。

本学の留学生は、2018年、2019年と、より高い日本語力の涵養を目指した文化理解支援活動の一部として2回参加したが、日本文化を本当の意味で体験でき、楽しく貴重な経験になったという意見が多く出ている。今後も、継続していくべき活動である。

ちなみに、「国際ソロプチミスト」は、1921年にアメリカで最初のクラブが誕生し、その後世界に広がって、現在は123の国と地域に76,000名の会員を擁するが、国連経済社会理事会の総合協議資格を持つ数少ない女性のNGOである。

図3は、昨年度の案内用ポスターである。

日本文化体験会 (2019.10.20(日))

- 主催：国際ソロプチミスト東京 (日本ロータリークラブの女性版)
- 日本の伝統文化を実際に体験することにより、理解を深めるという授業目的です。
 - グループに分かれて、茶道(さどう)・華道(かどう)・書道(しよどう)・折り紙(おりがみ)の4つの部屋を回り体験します。
 - その際、英語の話せる日本人大学生がアテンドで付きます。全て無料です。(日本学生協会基金 高松宮杯事務局)



図3：留学生の日本文化体験案内

5. 日本語教育のための書籍などの出版

本センターでは、日本語と日本語教育に関わる書籍の出版にも関わっている。今回は、この3年間に出版した書籍を2つ挙げる。

5.1 外国人のための百人一首『視覚で詠む百人一首』

百人一首に関する書籍は、今日まで研究書・一般書を問わず数多く出版されているが、現代にまで息づく日本人の感性に訴えて構成・解説しているものは少なく、また外国人の日本文化理解に資するように、現代日本語訳と英語の解説を同時に載せたものほとんどない。

そこで、2018年に本センターの活動の一環として、本書を出版した。本書は、日本画をふんだんに取り入れ、書名が示すように、仮名文字と合わせて、視覚的に日本文化の真髄が「詠める」ような構成をその特徴としている。この本を通じて、百人一首には全くの初心者の方や外国の方に、少しでも日本文化に興味を持って貰いたいと願っている。

図4は、本書の表紙画像である。

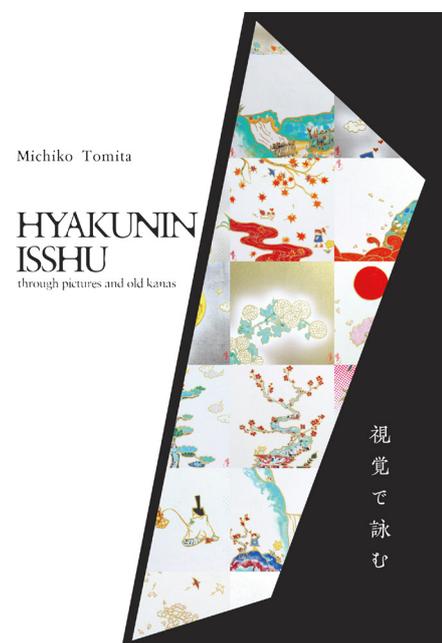


図4：『視覚で詠む百人一首』

5.2 『私の国の昔話—こころのユートピア—』

2019年、複数の本学留学生から自国の昔話を纏め、他国に紹介したいという提案があった。異国で学んでいる彼らにとって、自国の昔話を他の国の人びとに紹介することは、己のアイデンティティーを確認することにも通じることになる。

これこそは、本センターの存在理念の一つである、「多様化する留学生に対する日本語教育の実践研究」の視点が、日本語を媒介として世界を繋げる異文化理解促進にも連なると思い、このような世界の昔話集の刊行を企画し、本書の出版として結実させた。

本書で取り上げた昔話は、日本・中国・韓国・ベトナム・マレーシア・インドネシア・モンゴル・フランスの8カ国のものになった。構成や編集は、すべて留学生が担当し、掲載する話の選定、各物語の要約とその日本語訳、場面説明のためのイラスト作成、全体のレイアウト、本の装丁に至るまで、すべて留学生らの手で行った。原稿や表紙デザインの出来上がりの完成度は高く、本学の学生たちの構成やビジュアル効果に対するセンスが生きている。

担当者の人数の多さに、集まって議論するにもいろいろな困難があったが、留学生の主体的な活動が活かせるこのような出版企画は、機会があれば本センターの特色ある活動の一つとして定着する可能性がある。



図5：『私の国の昔話—こころのユートピア—』

6. おわりに

以上、本「日本語教育研究センター」開設の契機とその理念を説明し、過去3年間における活動について、主にその実践的な様相を紹介した。今後とも、活動を質・量ともに充実させながら、留学生に対する日本語教育と異文化理解支援において、更には彼らの主体的な社会活動の促進において、本センターが果たすべき役割を探究しつつ、その存在意義を高めていく所存である。

このような日本語教育研究センターでの数々の行事を通して、留学生には、日本語のみならずその奥に根ざした日本の文化を感じ取ってもらうことが大事であると考え。それは、彼らが当大学を卒業し社会に出たときにも、必ず役に立つと思う。

参考文献

- [1] 京都日本語教育センター編：『日本文化を読む』アルク出版（2013年）.
- [2] 飯島春敬：『古典かな字鑑』書藝文化新社（1997年）.
- [3] 富田美知子編著：『視覚で詠む百人一首』愛育出版（2018年）.
- [4] 富田美知子編著：『私の国の昔話』諷詠社出版（2020年）.
- [5] 有吉保翻訳：『百人一首（講談社学術文庫）』講談社（1983年）.